

日本英文学会関東支部  
第 25 回大会（2024 年度秋季大会）  
プログラム

日時： 2024 年 11 月 2 日（土）

会場・開催校：専修大学 神田キャンパス 10号館

〒101-8425 東京都千代田区神田神保町 3-8

(10 号館住所：東京都千代田区神田神保町 3-4-4)

アクセス方法

- 水道橋駅（JR）西口より徒歩 11 分(750m)
- 九段下駅（地下鉄／東西線、都営新宿線、半蔵門線）出口 5 より徒歩 2 分(130m)
- 神保町駅（地下鉄／都営三田線、都営新宿線、半蔵門線）出口 A2 より徒歩 3 分(220m)

日本英文学会関東支部事務局

〒162-0825 東京都新宿区神楽坂1-2

研究社英語センタービル

Tel/Fax 03-5261-1922

E-mail: [kanto@elsj.org](mailto:kanto@elsj.org)

|  |   |   |  |
|--|---|---|--|
| 12:00                                    | 開場・受付開始<br>受付：10階 EV ホール、控室：10階 10101 教室&11階 10115 教室、書店展示：10階 10102 教室   |   |  |
| 12:30<br> <br>12:50                      | 総会<br>10階 10104 教室  |   |  |
|  | 第1室<br>10階 10103 教室   | 第2室<br>10階 10104 教室   | 第3室<br>10階 10105 教室  |
| 研究<br>発表<br>1<br><br>13:00<br> <br>13:40 | D. H. Lawrence の<br><i>Aaron's Rod</i> における<br>identity と「移動の自由」<br>としての citizenship<br><br>(発表者)<br>杉本 悠<br><br>(司会者)<br>武藤 浩史 | C. S. ルイスの正戦論<br>—— <i>The Magician's<br/>Nephew</i> (1955) に見ら<br>れる理想と現実<br><br>(発表者)<br>渡辺 瑞紀<br><br>(司会者)<br>安藤 聡 | ウィリアム・サマセット・<br>モーム『人間のしがらみ』<br>に於ける少年の体罰への<br>欲望——ナショナリズム<br>と騎士道精神の交錯点と<br>して<br><br>(発表者)<br>金 永亜<br><br>(司会者)<br>前島 洋平 |
| 研究<br>発表<br>2<br><br>13:50<br> <br>14:30 | <i>The Rainbow</i> における<br>“anthropological turn”<br>——ゴシック、異教、<br>Bildungsroman<br><br>(発表者)<br>古城 輝樹<br><br>(司会者)<br>木下 誠     | 多重の監禁と存在の位階<br>——J. M. クッツェー<br>『エリザベス・コステ<br>ロ』論<br><br>(発表者)<br>紺野 直伸<br><br>(司会者)<br>本橋 哲也                         | なし   |

|   |   |   |
|---|---|---|
| <b>部門別<br/>シンポ<br/>ジウム</b><br><br>14:40<br> <br>16:40   | <b>【シンポジウム 1】</b><br>イギリス文学部門<br>9階 10091 教室  | <b>【シンポジウム 2】</b><br>アメリカ文学部門<br>9階 10092 教室  |
|   | 多様化するシェイクスピア受容<br>——日英における様々な<br>シェイクスピア作品<br><br>(司会・講師)<br>松山 響子<br>(講師) 高橋 百合子<br>(講師) 田村 真弓 | 逆流するモダン<br>——世紀転換期アメリカの<br>女性作家たち<br><br>(司会・講師)<br>松井 一馬<br>(講師) 斎藤 彩世<br>(講師) 山本 洋平<br>(講師) 新井 景子 |
| <b>懇親会</b> (17:15-19:15 ※要事前予約)<br>会場：専修大学 10号館 16階相馬永胤記念ホール<br>〒101-8425 東京都千代田区神田神保町 3-8<br><br>※ 懇親会の詳細については、本プログラム最終ページをご参照ください |   |   |

開場・受付開始 (12:00 より 10号館10階エレベーターホールにて)

13:00-13:40 【研究発表 1】

第1室 (10階10103教室)

(発表者) 東京大学大学院博士課程 杉本 悠  
(司会) 慶應義塾大学名誉教授 武藤 浩史

D. H. Lawrence の *Aaron's Rod* における identity と  
「移動の自由」としての citizenship

本発表は D. H. Lawrence の *Aaron's Rod* (1922) を取り上げ、主人公 Aaron の一見とりとめのない移動に対して移動についての社会的な知見を応用し、「移動の自由」としての citizenship という概念を用いて、一貫した読解を試みる。著者 Lawrence は第一次世界大戦中にスパイ容疑がかけられ、その影響が戦後も旅券の発行が遅れるなど、「移動の不自由」を強く感じる事となった。一方小説内で Midlands の炭鉱町から London、そして Florence へと気ままに移動する Aaron は大きな「移動の自由」を認められているが、それは Aaron が築いてきた「無害な自己」と、その規範を共有する英語話者たちによって保証されているにすぎず、英語話者の世界を出れば常に挑戦に晒される。こうした Aaron の citizenship が持つ限界は、当の Aaron には認識できないというアイロニカルな構造になっており、彼は次第に築き上げた citizenship を失い、移動に疑いの目が向けられる者=vagabond へと近づいていく。そこでは Lawrence 自身も体験したであろう、英国市民・英語話者に保証される「移動の自由」の脆さが浮き彫りにされる。

第2室 (10階10104教室)

(発表者) 一橋大学大学院博士課程 渡辺 瑞紀  
(司会者) 明治学院大学教授 安藤 聡

C. S. ルイスの正戦論——*The Magician's Nephew* (1955) に見られる理想と現実

ギリシア語、ラテン語、中世文学の研究者であった C. S. ルイス (Clive Staples Lewis, 1898–1963) の著作には伝統的キリスト教神学の強い影響が見られるが、ルイスはまた正戦論の提唱者でもあり、その書簡、著作の『キリスト教の精髓』 (*Mere Christianity*, 1952) や演説 “Why I Am Not a Pacifist” (1940) には戦争を正当化する考えが見られる。

その一方で、ルイスの小説『魔術師のおい』 (*The Magician's Nephew*, 1955) では、自らの考える大きな善のために小さな罪を犯し、それを正当化する登場人物たちが子供の目を通して繰り返し批判されており、このことは、作者ルイスがそうした詭弁に対して意識的であったことを示して

いるようにも思われる。本発表では、『魔術師のおい』でアンドルーと魔女の自己正当化の論法に向けられるディゴリーとポリーの批判的な反応に着目し、アウグスティヌスとルイス自身がその正戦論で用いるレトリックの具体例を参照しながら、キリスト教神学における暴力観に見られる根深い矛盾に対するルイスの内的葛藤をそこに読み取れるかどうかを考察してみたい。

### 第3室（10階 10105教室）

（発表者）東京大学大学院修士課程 金 永亜

（司会者）日本大学准教授 前島 洋平

#### ウィリアム・サマセット・モーム『人間のしがらみ』に於ける少年の体罰への欲望 ——ナショナリズムと騎士道精神の交錯点として

近代初期のイングランドでは、強い原罪観から子供は邪悪なものと捉えられ、それが体罰を正当化していた。だが、ロマン主義の文人が子供を無垢なものと称揚し、その価値観が徐々に広がっても、子供への体罰は依然として続くこととなる。子供の本性に対する考えに変化が生じた時、文学は体罰をどのように意味づけたのか？

本研究では、ウィリアム・サマセット・モーム（William Somerset Maugham）の『人間のしがらみ』（*Of Human Bondage*, 1915）に描かれた男子パブリック・スクール附属のプレパトリー・スクールでの体罰表象を分析し、生まれつき足に障害を持つ主人公が体罰を嫌がると同時に欲望していた背景を探究する。同時代に出版されたジョセフ・ラドヤード・キプリング（Joseph Rudyard Kipling）の「レグラス」（'Regulus', 1917）の体罰表象との比較や、少年文化と騎士道精神の関係の考察を通し、ナショナリズムと騎士道精神が、体罰を正当化する役割を担った可能性を探っていく。

### 13:50-14:30 【研究発表 2】

### 第1室（10階 10103教室）

（発表者）東京大学大学院博士課程 古城 輝樹

（司会）成城大学教授 木下 誠

#### *The Rainbow*における“anthropological turn”——ゴシック、異教、Bildungsroman

Jed Esty は、1930年代以降の帝国の解体に伴う社会や文学における普遍性から地域性への変化を“anthropological turn”と呼んだ。Esty自身認めるようにこの変化は30年代以前から文学のな

かに見られており、帝国主義の下で成熟が困難とされてきた登場人物たちの状況に大きな影響を及ぼしている可能性が高い。この観点から、本発表では、Jed Esty の “anthropological turn” 論と Bildungsroman 論に基づいて、D. H. Lawrence の *The Rainbow* (1915 年) を論じる。イングランドの地域性と密接に結びついた宗教的ゴシック建築に対する登場人物の態度に着目し、ゴシック建築が彼女らの成長にどのように影響を与えているかを考察する。特に、本作の登場人物たちが持つコスモポリタンの性質を強調する Tony Pinkney の “Gothic Modernism” 論を踏まえつつも、本発表では第 2 世代の Anna と第 3 世代の Ursula の描写に注目する。異教的ですらある宗教的ゴシック建築に対する彼女らの態度と地域的つながりの差異がもたらす成長への影響の分析を通じて、“anthropological turn” を描いたモダニスト小説として本作の読解を試みたい。

第 2 室 (10 階 10104 教室)

(発表者) 東京大学大学院博士課程 紺野 直伸  
(司会) 東京経済大学教授 本橋 哲也

### 多重の監禁と存在の位階——J. M. クッツェー『エリザベス・コステロ』論

本発表では、J. M. クッツェーの、エリザベス・コステロを主人公とする 90 年代以降の作品群と、彼の講演「ベケットを見る八つの方法」(2006) を対象に、それらに共通する「監禁」の主題について考察を加える。

『エリザベス・コステロ』とそのシリーズにおける監禁の問題は、これまで主に動物倫理の観点から論じられてきた。しかし、同作品群では、神が世界という「檻」に人間を閉じ込めたという表現や、小説自体が「観念の動物園」であるといった表現が見られる。本発表は、それらのつながりから、この作品群の語りの構造に新たな解釈を与えるものである。

人間が動物を檻に監禁するように、神が人間を世界に監禁するように、語り手は登場人物を、さらに作者はそれら両者を、フィクションという檻に監禁する。このように読むことは、クッツェーが南アフリカにおける白人であることとどのように関係しているのか、そのことについても考えたい。

14:40-16:40 【部門別シンポジウム】

<シンポジウム 1：イギリス文学部門> 9階 10091 教室

(司会・講師) 駒沢女子大学教授 松山 響子

(講師) 津田塾大学非常勤講師 高橋 百合子

(講師) 大東文化大学教授 田村 真弓

### 多様化するシェイクスピア受容——日英における様々なシェイクスピア作品

イギリス文学を代表する作家であるウィリアム・シェイクスピアの戯曲は初演からすでに 400 年以上経っているにも関わらず、ほぼ途切れることなく劇場のレパートリーに入り続けている。400 年の間に演劇を取り巻く社会状況は大きく変容しており、シェイクスピア作品はその変容の荒波を泳ぎきったとも、あるいは「古典作品」ゆえに多少目溢しをされているとも言える。特に、17 世紀後半以降は作品に権威性が与えられていったことにより、数々の「改作」や「修正」、そして何より他ジャンルへの変身を通じて作品受容の形も多様化していった。本シンポジウムでは、主に日本でのシェイクスピア受容とイギリスにおける日本発のシェイクスピア上演の受容を通じて多様化の先にあるシェイクスピア作品の立ち位置を改めて考えていきたい。

### シェイクスピア原作の舞台芸術作品の上演とその受容をふりかえる

#### ——オペラとバレエを中心に

高橋 百合子

シェイクスピアの作品を原作とする様々な舞台芸術作品は、1980 年代以降、海外団体の公演に加え、国内団体による画期的な上演が重ねられてきたこともあり、近年ますます存在感を増してきている。ジャンルの垣根を越えた作品の上演は、幅広い観客層を巻き込むこととなり、シェイクスピア受容は、従来は考えられなかった広がりを見せ、まさに新たな局面を迎えつつあると言える。本発表では、80 年代からこれまで、主に国内で上演されたシェイクスピア関連のオペラとバレエの上演について、受容史の文脈においてあらためて焦点をあてていく。オペラでは、2004 年の新国立劇場の野田秀樹演出によるヴェルディのオペラ『マクベス』、バレエでは、この春大いに話題となったマシュー・ボーン振付バレエ『ロミオとジュリエット』など、さまざまな公演をふりかえってみたい。

## 日本人によるイギリスでのシェイクスピア劇の上演とその受容

田村 真弓

日本のシェイクスピア上演史に多大な影響を及ぼしたのが、1970年に始まるロイヤル・シェイクスピア・カンパニーの来日公演であることは疑いの余地がない。1980年代後半のバブル期以降は、イギリスの劇団によるシェイクスピア劇の来日公演が増加し、それに呼応するように、日本人によるイギリスでのシェイクスピア劇の上演も盛んに行われるようになった。本発表では、蜷川幸雄、野村萬斎、野田秀樹といった日本を代表する演劇人のイギリスでのシェイクスピア作品の上演に焦点を当て、イギリスで発表された劇評を分析することにより、イギリスでの日本のシェイクスピア劇の上演の受容、すなわち、日本人がシェイクスピア演劇の本場、イギリスでシェイクスピア劇を上演することの意義を明らかにしたい。

## 様々なシェイクスピアの姿——マンガとアニメにおけるシェイクスピア利用——

松山 響子

マンガやアニメ、ゲームなどのエンターテインメントの中で、外国文学や作家などがポップに利用される機会を目にすることが多くなってきている。また、教育機関の中で外国文学に触れるよりも、ポップなエンタメとして利用される外国文学に触れることの方が近年多くなっているような気がする。これらの外国文学のポップな利用は、日本における外国文学の受容の発露と取ることができると考えられる。英文学の歴史の中で重要視されることが多いウィリアム・シェイクスピアもその例外ではない。今回は、21世紀以降に登場したマンガやアニメにおけるシェイクスピア作品の利用を通して、日本におけるシェイクスピア受容の姿を再確認していく。対象とする作品は、マンガ『薔薇王の葬列』『寄宿学校のジュリエット』、アニメ『PSYCHO-PASS』『機動戦士ガンダム 水星の魔女』、2.5次元舞台『PSYCHO-PASS Virtue and Vice』『A3』『舞台刀剣乱舞』等を中心に論じていく。

## <シンポジウム 2：アメリカ文学部門> 9階 10092 教室

(司会・講師) 中央学院大学准教授 松井 一馬

(講師) 同志社大学准教授 斎藤 彩世

(講師) 明治大学准教授 山本 洋平

(講師) 学習院大学教授 新井 景子

## 逆流するモダン——世紀転換期アメリカの女性作家たち

19世紀から20世紀にかけてのアメリカ文学は、ロマン主義からリアリズム、地方色文学、自然

主義、そしてモダニズムへと進展してきたとされる。歴史が物語である以上、この文学史もまた物語であり、そこには文学形式の発展というストーリーアークが容易に見出せるだろう。そして、こうした直線的なナラティブのしわ寄せを受けたのがセアラ・オーン・ジュエット、ウィラ・キャザー、イーディス・ウォートンといった世紀転換期に登場した女性作家たちである。彼女たちはモダニストたちよりも一、二世代前だったがためにその複雑さが見過ごされ、各々、地方色作家、ノスタルジー作家、心理リアリズム作家とのレッテルを貼られてしまった。もちろん今日ではそれぞれに再評価がなされているが、それでもなおその文学史上の立ち位置は変わらない。本シンポジウムは彼女たちの作品を多様な視点から再検討することで、それぞれの問題意識と時代性を浮き彫りにし、その文学史における定位置を揺るがすことを企図するものである。

### セアラ・オーン・ジュエットの描く個人の意識と自由——*A Marsh Island*を中心に

斎藤 彩世

セアラ・オーン・ジュエットはアメリカ文学史で地方色文学の代表作家として一定の評価を受けているものの、彼女の作品は狭い世界を無批判に描いた小品とみなされることも少なくない。ジュエット作品に精通している批評家たちはこれを過小評価と考え、フェミニズム作品として読むか、無自覚の階級意識やレイシズムを問題とするかに分かれて、作品の再評価を試みてきたが、現在も依然としてジュエット作品を等身大に評価できていないのではないかという反省が見られる。この問題に取り組む上で有効と思われるのは、ジュエットを近代リアリズム小説の成立を支えた作家として評価する研究だ。本発表ではその見方を受けて、*A Marsh Island* (1885)を中心にジュエット作品が19世紀の共同体における個人の葛藤を描いたリアリズム小説であることを考察した上で、同時に個人の視点や意識を重視し、共同体の価値観に縛られない生き方を模索した、19世紀とモダンの懸け橋としてのジュエット像を提示したい。

### 煌めく断片、響き合う短編——ジュエット、キャザー、〈はかなさ〉の詩学

山本 洋平

モダニズム前夜に活躍したセアラ・オーン・ジュエットと彼女を師と仰いだウィラ・キャザーはともに卓抜な短編作家でもあった。晩年のジュエットがキャザーに“Nebraska life”を書くよう助言したことはよく知られているが、キャザーが師から学んだのは、地方色的モチーフにとどまらない。この機会に考えてみたいのは、短編を長編小説へと織りなす際の美学とダイナミクスをめぐる両女性作家の影響関係である。モダニストたちにも受け継がれるこの創作上の問題を、死後のジュエットに捧げられた *O Pioneers!* (1913) とその原型となる短編作品を中心に、ジュエットのテキスト細部と長編の構成上の響き合いから照射することで、キャザーの創作美学をより深く理解することが本発表の目的である。

## イーディス・ウォートンとモダニスト・ノスタルジア

新井 景子

イーディス・ウォートンはヘンリー・ジェイムズの確立した心理リアリズム小説の後継者とされ、従来モダニズム作家の範疇には入れられてこなかった。ウォートン自身、モダニズム的な実験や新しい大衆文化から距離を置いていたこともその一因と言えるだろう。一方、第一次世界大戦中にパリに住んでいたウォートンは、精力的に慈善活動や前線訪問を行い、大戦前後の空気をモダニズムの作家たちと共有していた。また、女性や結婚をめぐる「モダン」な問題を作品の中で描いており、近年のモダニズム再考の動きの中でウォートンとモダニズムの関係も問い直されてきている。そこで本発表では、第一次世界大戦中および直後に執筆された *Summer* (1917) と *The Age of Innocence* (1920) を取り上げ、一見モダニズムと相反するように見える作品中の保守的あるいは回顧的な側面の中に、大戦を経験したウォートンの時代認識がいかに見いだせるかを検討することで、モダニズムへと続く流れの中にウォートンを位置づけることを試みたい。

## かれらの時代に——ウィラ・キャザー *The Professor's House* の失敗

松井 一馬

ウィラ・キャザーの *The Professor's House* (1925) は、フィッツジェラルドの *The Great Gatsby* やヘミングウェイの *In Our Time* と同じ年に出版された。この作品がしばしば読者を戸惑わせるのは、アンバランスな三つのパートで構成されているためである。実際、俗物的な世間や家族の中で孤独と厭世を深めてゆく大学教授を描く第一部および第三部と、彼の若き友人による先住民遺跡の発掘と挫折を描く第二部は、キャザー自身が言うようにソナタやオランダ絵画の技法を模した実験だとしても、やはり調和せず連続性も欠いている。だが、批評的には失敗とも見なされてきたその不調和と不連続（それは構成だけでなく登場人物の造形にも見出せる）にこそ、むしろこの作品の時代性は表れる。それこそが、キャザーという作家の見た、第一次世界大戦を経て狂乱の時代を迎えたアメリカだったのだ。*The Professor's House* はその失敗にこそ、どんなモダニストにも劣らずアメリカの 1920 年代を、「かれらの時代」を映し出しているのである。

## 会場アクセスマップ



## アクセス方法

- 水道橋駅（JR）西口より徒歩 11 分(750m)
- 九段下駅（地下鉄／東西線、都営新宿線、半蔵門線）出口 5 より徒歩 2 分(130m)
- 神保町駅（地下鉄／都営三田線、都営新宿線、半蔵門線）出口 A2 より徒歩 3 分(220m)

## 懇親会について (17:15-19:15)

会場：専修大学 10 号館 16 階 相馬永胤記念ホール

〒101-8425 東京都千代田区神田神保町 3-8

(10 号館住所：東京都千代田区神田神保町 3-4-4)

会費：6,000 円 ※ご出席の場合、以下の URL または QR コードにて事前にご予約ください。会費は事前振り込みにて承ります（受付は Web アンケート申込先着順といたします）。

予約用 URL：<https://forms.office.com/r/iyUJXUp4xr>

※予約は 10 月 22 日（火）締切、事前振込は 10 月 29 日（火）締切



予約用 QR コード